

新規陽性者の発生動向

(1) 大阪府の発生動向

- 直近 1 週間の新規陽性者数は減少に転じたが、第四波のピーク時の約 2 倍と依然、高水準であり、陽性率も 10% を超過した状態。
- 人流は 8 月 2 日の緊急事態措置適用後やや減少して以降、横ばいからやや増加傾向。今後、感染再拡大の恐れ。
- 大阪府でも、感染力が極めて高いとされるデルタ株への置き換わりが 8 月に急速に進み、現在、ほぼ置き換わったものと推定。
デルタ株の影響により、これまでクラスターの発生が見られなかった大型商業施設や、感染防止対策を一定講じていても、3 密のいずれかに該当するケースでの感染が確認。
また、感染が比較的少なかった 10 代以下の感染が急増。推定感染経路として、子どもから大人への感染が疑われる事例も複数確認。
第四波以前にはない感染拡大の場面や感染経路が確認されている。
これらの影響から、クラスターとして、児童施設関連、大学・学校関連、企業事業所関連の割合が大きく増加。

(2) 感染・療養状況とワクチン接種状況

- ワクチン 2 回接種率は、65 歳以上が 84.7%、40～64 歳で 36.2%、39 歳以下で 11.0% となり、現役世代を含めて進んでいる。
- ワクチン未接種者における新規陽性者数と比べ、ワクチン接種者に占める新規陽性者数は少ない。
- 60 代以上の新規陽性者数は、発症予防効果が期待されるワクチン接種の推進により、他の年代と比べ発生が抑制されているものの、2 回接種後 14 日以降に発症（無症状病原体保有者を含む）した者の割合が徐々に増加（8 月（29 日時点）：13.9%）。
ワクチン接種後も感染する可能性や発症予防効果により感染に気付かないまま周囲に感染を拡げる可能性もあることから、ワクチン接種後の感染予防対策継続が必要。
- 6 月以降新規陽性者のうち、ワクチン 2 回接種後 14 日以降の発症者 920 名のうち、重症化した者は 3 名、死亡例 2 名確認（1 名重複）。
ワクチン接種歴別の重症・死亡の割合は、未接種者に比べ、2 回接種後 14 日以降に発症したの方が低い（ワクチンによる重症化予防効果が期待）。

感染状況と医療提供体制の状況について

医療提供体制の状況

- 一般医療と両立可能な重症病床使用率は約9割（8/17時点は約5割）から急増し、60代以上新規陽性者数がやや増加傾向にあることから、更なる重症者数の増加が懸念され、極めて厳しい状況。災害級非常事態589床を分母とする重症病床使用率も約5割と厳しい状況。軽症中等症病床使用率も7割強とひっ迫。
- 第五波（現時点約2か月半）では、30代以下の新規重症者数が第四波（約3か月半）を超過し、若年層の重症化が多く見られる。40・50代の重症者数も第四波と同水準まで増加。
一方、ワクチンによる重症化予防効果により、60代以上の重症者数は第四波と比較し、激減。

今後の対応方針について

- 直近1週間の新規陽性者数は減少に転じているが、1日平均2000人と極めて高水準。人流がやや増加傾向にあることから、今後、感染再拡大の恐れがある。
- デルタ株の影響により、3密のいずれかに該当する場合での感染や10代以下に多く感染が広がるなど、第四波以前にはない、感染拡大の場面や感染経路が確認。
- 一般医療の制限が今後懸念されるレベルまで重症者数が増加し、極めてひっ迫。ワクチン未接種層が多い40・50代や30代以下の若年層にも重症患者が多く確認。軽症中等症病床もひっ迫。
- 60代以上新規陽性者に占めるワクチン2回接種後14日以降に発症（無症状病原体保有者を含む）した者の割合が徐々に増加。ワクチン効果の低下や3回目接種の必要性については、国等における科学的知見を注視。

⇒医療提供体制は極めてひっ迫しており、新規陽性者数が1日2千人程度と高水準である現状においては、緊急事態措置の下、人流抑制による感染の最大限の早期収束が必要。

⇒デルタ株の影響により、今まで以上の換気や人との距離、大声を出さないなどの3密を回避した感染予防対策の更なる徹底が必要。

⇒ワクチン接種による重症化予防、発症予防効果が見られることから、50代以下のワクチン接種の促進が必要。

一方、ワクチン2回接種後14日以降の発症者の増加や、ワクチン接種が各年代層に十分に進んでいない状況での周囲への感染の拡がりを防ぐため、ワクチン接種後も感染防止対策の徹底の働きかけが必要。